

令和4年度「知事と市町長の円卓対話」（伊賀市）概要

- 1 対話市町 伊賀市（岡本^{おかもと} 栄^{さかえ} 伊賀市長）
- 2 対話日時 令和4年5月11日（水）14：15～15：15
- 3 対話場所 史跡旧崇廣堂
- 4 視察場所 伊賀文化産業城（伊賀上野城）
- 5 対話項目1 伊賀ってこんなところですよ！！

6 対話概要

対話項目1 について

（市長）

知事に就任されてからの感想、また知事としてどのようなことに取り組んでいこうと考えているかについて教えてください。

（知事）

感想については、三重県に帰ってきて、人の優しさ、自然や文化のよさを感じることができ、三重県はよいところだと思っています。

知事としての取組については、伊勢神宮や忍者をはじめとした観光政策や防災対策に力を入れていかなければならないと考えています。また、人口減少対策にもしっかりと取り組んでいかなければならないと考えています。関西圏から多くの移住者がある伊賀市の取組も参考にしながら、県全体がさらに発展していくように取り組んでいきたいと思っています。

（市長）

感染症対策についても、生活圏の中で考えていかなければならない問題であるため、京阪神圏の知事との情報交換や協調した対応をしていただきたいと思います。

アフターコロナにおいては、観光が重要なものの一つであり、三重県は高いポテンシャルを持っていると思います。そうした取組を行うためにも、県の財政再建についてしっかりと取り組んでいただきたいと思います。

（知事）

京阪神圏の知事との関係については、例えば奈良県知事、和歌山県知事、京都府知事、滋賀県知事とは近い関係であり、話しやすい間柄だと思っています。

県財政については厳しい状況だと感じています。コロナ禍ということもあり、県内経済も厳しい状況ですが、今後コロナが収束してくれば、観光の振興にしっかりと取り組んでいきたいと思っています。

(市長)

コロナ禍において価値観が変化し、DXが進むなど、どこにいても仕事ができる時代になりました。伊賀市のキャッチコピーは「そこそこ田舎、そこそこ都会」ですが、ゆったりとした自然の中で暮らせる環境等、伊賀市はトップを走るエリアになったと感じています。

地域の文化や伝統は、人口問題や観光にも関係し、重要な柱の一つだと思います。伊賀には、文化、歴史、伝統があります。忍者文化、松尾芭蕉の俳諧、能を生んだ観阿弥が生まれたところであること等、他にはない優れたものを持った地域だと思います。これらを生かしながら、「2025年大阪・関西万博」に向けた誘客を県とともに行っていければと思います。

(知事)

東京は、コロナ禍の前は転入超過ばかりでしたが、転出超過に転じました。働き方が変化し、テレワーク等が可能になったため、必ずしも東京にいる必要はなくなりました。

自然の中で住みながら、そこで仕事ができるようになってきており、今後はこうした生活の仕方が広がっていくのではないかと思います。

伊賀には、おいしい酒、食べ物では伊賀牛や伊賀米もあり、生活していく中で、これらのものがすぐ近くにあるということはいいことだと思います。

また、伊賀にしかないものは非常に重要です。例えば、忍者は他にもありますが、本流は伊賀です。その他、伊賀上野城の石垣は、コロナ収束後には世界から多くの方が見に来られると思います。

(市長)

先日、名張市長と話をしました。力を合わせられるところは、互いに補い合い、高め合っていくべき時代になったということを二人で話しました。同様の趣旨で、よいパートナーとして、県ともいろいろなことに取り組んでいけたらと思っています。

工芸品については、さまざまなものがありますが、例えば、「伊賀くみひも」は、これからの展開の仕方によっては、「2025年大阪・関西万博」でも面白いことができるのではないかと思います。

また、「伊賀焼」は、桃山時代から芸術性の高い作品が作られ、多くの可能性

を秘めたものであり、「伊賀焼」の展開も進めていきたいと思ひます。

日本全体で農業製品の輸出が十分できていない状況にありますが、県全体で多くの産品があることから、農業製品の輸出についてもしかり取り組んでいく必要があると思ひます。儲かる農業、儲かる畜産業という話がありますが、そうした取組が若い人を自ずと呼び寄せ、後継者ができることにつながるのではないかと思ひます。

(知事)

コロナの収束後は、県の優れた産品等を積極的に外に出していくことが重要だと思ひています。

「2025年大阪・関西万博」に来られる多くの人に三重県全域へ来ていただきたいと思ひます。その際、関西からのゲートウェイとなるのは、伊賀市および名張市だと思ひています。

「2025年大阪・関西万博」では、三重県も「関西パビリオン」へ参加することになっているため、伊賀市をはじめ市町にもご協力をお願いしたいと思ひます。

日本の酒は海外で人気があり、「伊勢志摩サミット」で採用された「半蔵」も非常に人気があります。伝統工芸品の「伊賀くみひも」や焼き物の「伊賀焼」も積極的に外へ押し出していけばいいと思ひます。

持続可能な継続できる農業、林業、水産業については、これからどのように取り組んでいくかを考えていかなければなりません、皆が住みよく、暮らしよいいと思ひえる三重県を目指していきたいと考えています。

(市長)

移住の話について、株式会社宝島社の2022年版「住みたい田舎」ベストランキングにおいて、全国の人口5万人以上20万人未満のまちで「若者世代・単身者が住みたいまち」で27位、「子育て世代が住みたいまち」で27位、「シニア世代が住みたいまち」で20位でした。また、東海エリアでは「若者世代・単身者が住みたいまち」で6位、「子育て世代が住みたいまち」で6位、「シニア世代が住みたいまち」で5位であり、皆さんに好評をいただいています。

「伊賀・山城南・東大和定住自立圏」は、伊賀市が中心市となり、京都府の笠置町と南山城村、奈良県の山添村とが一つの広域行政を行っています。3府県をまたいだ定住自立圏は日本で唯一です。

コロナ禍において、他府県ナンバーの車への嫌がらせ等があったため、「伊賀・山城南・東大和定住自立圏」では、生活圏を共有していることを表示する「圏域証」を作りました。三重県という枠組みもありますが、それを越えた生活圏も大

切にしていきたいと思いをします。

国の管轄について、伊賀市は、河川は近畿地方整備局のエリア、道路は中部地方整備局のエリアになっているなど、管轄が異なります。日本で唯一の3府県またぎの圏域が有効に機能するように、将来に向けたモデル地区になるような仕組みができればと思いをしますので、協力いただけたところがあればお願いしたいと思いをします。

(知事)

伊賀市と名張市が協力していくという話がありましたが、県としても伊賀市および名張市と連携しながら取組を進めていきたいと思いをします。

県は、これまで以上に移住促進に力を入れていきたいと思いをします。移住先進市である伊賀市の知恵も借りながら、連携して取り組んでいきたいと思いをします。

生活圏というものは重要であり、同じ生活圏であれば県境を越えて行き来するのは当然のことだと思いをします。

道路や河川で国の管轄が異なるという問題については、面倒な面があるかとは思いますが、各機関の情報を得て、それらをうまく利用しながら対応していただければと思いをします。今後は、地域での事業等を考えるときには、どこかでまとめて検討するという事もあるのではないかとと思いをします。

(市長)

「リニア中央新幹線」に関連して、首都機能移転候補地となった畿央高原に車両整備等を行う車両基地を作っていただくよう要望したいと考えています。

名古屋へ行く際に、JRを利用せず三重交通の高速バスや近鉄を利用する人が合わせて約3万人、往復で約6万人います。JR関西線の利用者増を図るためには、JR関西線の列車を伊賀鉄道伊賀線へ乗り入れたり、JR東海と連携し伊賀鉄道忍者市駅発名古屋行きの列車や加茂行きの列車を運行すること等により、利便性を向上しなければ根本的な解決にはならない旨をJR西日本に申し上げました。

(知事)

鉄道を利用してもらうためには、利便性の向上にしっかりと取り組んでいただく必要があると思いをします。

最も重要なことは、地元がしっかりとまとまることだと思いをします。伊賀市、亀山市、三重県で、JR西日本にも入っていただいて話をしていくことが重要だと思いをします。お互いに知恵を絞りながら鉄道を残していきたいと思いをします。

「リニア中央新幹線」については、三重県駅の利便性をリニアの沿線だけでな

く、県内全域に波及させていくことが重要だと思います。伊賀地域は当然ですが、県南部からも使っていただきやすいようにさまざまな交通網を整備していかなければいけないだろうと思います。また、三重県だけでなくおそらく滋賀県からも来ていただけるようにしていかなければならないと思います。

そうした波及効果という意味では、車両基地もその一つであると思います。

「リニア中央新幹線建設促進三重県期成同盟会」とも歩調を合わせながらJR東海や、関西線の関係ではJR西日本に対して県・市が連携しながら協議等をしていくことが重要だと思います。